

2017年(平成29年)2月19日(日曜日)

言 葉 宣 布

太鼓の響きに力走誓う

長の信貴芳則・岸和田市長
が「インバウンドを追い風
になるよう盛り上げてい
く。選手の皆さんよ寺てる

米国や豪州、宮城県大崎
市など、マラソンのコース

となる各市町の姉妹都市な
どから招いた19人が紹介さ
れ、米国サウスサンフラン
シスコ市から参加するロイ



(上から)河崎さん、山崎さん、藤さん

タンザニアに赴き、治療に臨む山崎
(山崎さん提供)

山崎さんは大震災の4年ほど前から、仲間数人と自費でタンザニアでの白内障治療支援を続けていた。定期的に現地に足を運び、無償手術や同国的眼科医に日本の最先端の治療技術を教えるなどしてきた。一方で「個別の手術では救える患者の数にも限りがある。将来につながる持続的な支援ができないか」との思い

日本から約1万キロ離れたアフリカ・タンザニアでの白内障治療

貢献活動として昨年から精力的な支援を始めた。東日本大震災の被災地で同社社員と愛知県の眼科医との間で交流が生まれたのがきっかけだつた。支援にあたるメンバーたちは「現地の眼科医療の底上げに継続的に関わっていく」と誓つている。

（川井竜太）

ロート製薬は明治時代の1899年の創業。現在、アイケア商品で国内トップを走る製薬会社だ。同社は6年前の東日本大震災時、震災遺児・孤児らに向けた民間奨学金制度を設立。その発足に際し、震災復興支援室長として現地に派遣された河崎保徳さん(56)(現・広報・CSV推進部長)は協力企業や官庁との調整、奨学生の募集などで奔走した。そして、被災地の医師の支援で宮城県を訪れていた愛知県春日井市の眼科医、山崎俊さん(49)と知り合つた。

山崎さんは大震災の4年ほど前から、仲間数人と自費でタンザニアでの白内障治療支援を続けていた。定期的に現地に足を運び、無償手術や同国的眼科医に日本の最先端の治療技術を教えるなどしてきた。一方で「個別の手術では救える患者の数にも限りがある。将来につながる持続的な支援ができないか」との思い

日本から約1万キロ離れたアフリカ・タンザニアでの白内障治療に、大阪の老舗製薬会社「ロート製薬」(大阪市生野区)が、社会貢献活動として昨年から精力的な支援を始めた。東日本大震災の被災地で同社社員と愛知県の眼科医との間で交流が生まれたのがきっかけだつた。支援にあたるメンバーたちは「現地の眼科医療の底上げに継続的に関わっていく」と誓つている。

（川井竜太）

ロート製薬は明治時代の1

899年の創業。現在、アイ

ケア商品で国内トップを走る

製薬会社だ。同社は6年前の

東日本大震災時、震災遺児・

孤児らに向けた民間奨学金制

度を設立。その発足に際し、

震災復興支援室長として現地

に派遣された河崎保徳さん

(56)(現・広報・CSV推進部

長)は協力企業や官庁との調

整、奨学生の募集などで奔走

した。そして、被災地の医師の

支援で宮城県を訪れていた愛

知県春日井市の眼科医、山崎

俊さん(49)と知り合つた。

山崎さんは大震災の4年ほ

ど前から、仲間数人と自費で

タンザニアでの白内障治療支

援を続けていた。定期的に現

地に足を運び、無償手術や同

国的眼科医に日本の最先端の

治療技術を教えるなどしてき

た。一方で「個別の手術では

救える患者の数にも限りがあ

る。将来につながる持続的な

支援ができないか」との思い

を強めていた。

山崎さんの地道な活動を聞

き、情熱に胸打たれた河崎さ

んも毎年、大勢が白内障によ

つて失明するタンザニアの苦

境に思いをはせるようになっ

た。

同国の人口は約5000万人。日本の半分弱に相当する

が、眼科医はわずか30人程度

とされる。マラリアなど深刻

な感染症対策に重点がおか

れ、眼科医療には光があまり

当てられていないという。

「うちは目と関わり続けて

きた企業。タンザニアのため

ニア支援の活動に乗り出し

た。

同社には同国の実情に通じた頼りになる社員がいる。か

つて国際協力機構(JICA)

の派遣ボランティアとして2

年間、同国に赴き、農村の道

路整備支援などにあたった

部佳恵さん(38)(2013年入社)だ。

部さんはまず、山崎さんが現地で必要とする支援内容を丹念に聞き取った。それを踏まえ、第1弾の支援として関連会社製の人工眼内レンズの提供を決めた。眼内レンズは、白内障で濁った眼球の水晶体の代わりに入れる医療器具。

ニア支援の活動に乗り出し

た。

ロート製薬の支援はまだ緒

に就いたばかり。だが今後、

協力企業を募り、支援規模を拡大させ、いざれば現地に医師やスタッフの養成も担える

医療拠点を作ることを視野に

入れる。

「子や孫の顔を自分の目で

見る。それは住む国に関係なく誰もが当たり前に望むこと。その当たり前の願いを少しでもかなえたい」と河崎さん。藤さんは「いつか外国の援助がなくとも現地で十分な治療が受けられる環境が整えば」と夢を描く。

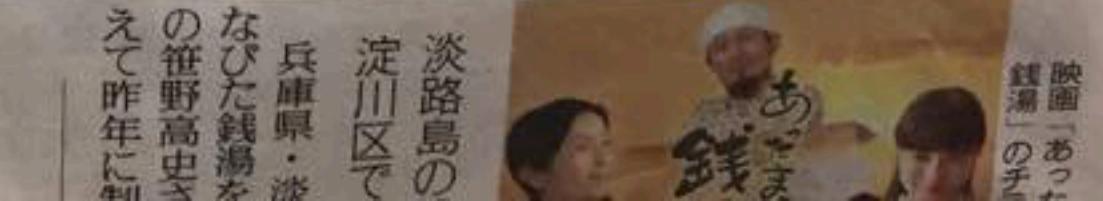
タンザニアで支援の最前線に立つ山崎さんは「『困っている人のために』という思いを個々の社員まで持つ熱い会社。同志を得た思いだ」とロート製薬の存在を心強く思いながら、「治療を受けなければ白内障による失明は防ぐことが可能だ。その機会がないばかりに光を失う人を世界から一人でも減らしたい」と前を見据える。

タンザニアに光 眼科治療底上げ



メモ 白内障は、眼球でレンズの役割を果たす水晶体が白く濁る病気。加齢に伴い罹患することが多い。世界の失明原因の半分を占めるとの統計もある。手術の場合、人工眼内レンズを取り除き、人工眼内レンズを入れて代用する。日本の失明原因のトップは緑内障(20.9%)で、白内障は8番目(3.2%)にとどまる。

東日本支援の縁 海外で結び



最後の名人作

映画「あつた
錢湯」のチラシ

加工されている。

加工されている。